第２章　授業で勝負する
第４節　授業記録を読む（付録）

この節は、以下の４項で構成しています。

■授業記録を読む「総合」■

■授業記録を読む「文学」■

■授業記録を読む「説明文」■

■明日の授業を作る■
◎「学びの共同体」を作る
◎【補説】「学びの共同体」をめざして
◎説明文と文学の授業を作る
【補足】2014.1.1
◎「学びの共同体」と「授業のＵＤ化」で子どもたちの学びをつくる
【付録】2014.4.1
◎「島ひきおに」
【付録】2015.1.1
◎「イースター島にはなぜ森林がないのか」
【付録】2015.1.1　　←　今回の追加分です
◎「海のいのち」

■明日の授業を作る■

◎「海のいのち」

東京書籍「新しい国語　６年　下」の冒頭に掲載されている文学教材です。この教材は光村図書にもありますが、単元目標等が多少異なっていると思います。「論理」を目標にした文学の授業というのが実践のコンセプトです。

第６学年　　国語科学習指導案

「論理的に文学作品を読む力」をテーマに、いくつかの新しい試みに挑戦します。指導案を見ていただいて、興味のある時間・部分を自由にご覧ください。忙しい時間を割いていただくのですから、授業途中の出入りは自由にしていただいて結構です。

①2014年10月17日(金)　第１校時
②2014年10月20日(月)　第２校時
③2014年10月21日(火)　第５校時
④2014年10月21日(火)　第６校時
⑤2014年10月22日(水)　第５校時
⑥2014年10月23日(木)　第４校時
⑦2014年10月24日(金)　第１校時
⑧2014年10月27日(月)　第２校時
⑨2014年10月27日(月)　第３校時

児童数　　６名(男子２名、女子４名)
指導者　　草尾佳秀

1　単元名　　人物の生き方を考えながら読もう
　教材名　「海のいのち」(東京書籍　小学校６年下)

2　目標
○物語に出てくる人物の関係をおさえながら読む。【読むこと】
○物語が自分に最も強く語りかけてきたことについて考える。【読むこと】

単元の評価規準

関心・意欲・態度	書くこと	読むこと	言語事項
○物語に興味を持ち、物語が自分に最も強く語りかけてきたことを考えながら読もうとしている。	○自分が感じたことが相手に伝わるように、構成や文章表現に気をつけてまとめている。〈(1)ウ〉	○場面構成や人物の関係を手がかりに、中心人物の変化を読み取り、物語が自分に最も強く語りかけてきたことをとらえている。〈(1)エ〉 ○物語を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりしている。〈(1)オ〉	

3　指導について
○　本教材では、物語の人物関係に注意して読み、心に残ったことをまとめる活動を通して、物語が自分に語りかけてきたことを自分の言葉で表現する力をつけることをねらいとしている。
　物語は、中心となる人物である太一を軸に展開するが、太一は、父や与吉じいさなど、周りの人物とのかかわりの中で成長していく。人物と人物がどのようにかかわっているのか、それが物語全体にどのように影響するのかに着目させ、直接的な表現だけでなく暗示的に示された事柄にも着目しながら、人物の心情を深く読み取ることができるようにしたい。

これまでの学習で、作品の主題について考える学習を行っている。ここでさらに、自分が作品から受けたものを言葉にし、自分がどのように感じたのか、その理由は何かをまとめて伝え合うことは、児童の読みをより深めることになるだろう。また、自分の感想や考えを、効果的に伝わるように文章にすることで、書く力の育成も期待できる。以上のような理由から、本教材を設定した。

○　１学期の文学教材「風切るつばさ」と「ばらの谷」では、三部構成(はじめ・中・おわり)や作品を「一文で書く」活動に焦点を当てて学習した。協同的な学びの中で、学習集団として読みの基本的なスキルは身につけてきている。

また、「ばらの谷」では、単元目標である「物語が自分に最も強く語りかけてきたことをまとめる」活動に取り組んだ。しかし、表象的な読みに終始し、自分の言葉で作品を抽象化し主題に迫ることはできなかった。

こうした実態から、１学期の学習内容を確かめる活動を組み入れつつ、ていねいに作品の主題をとらえさせていく必要があると考える。

○　授業は次の基本姿勢で行う。

・学習集団を育てる観点から、協同的な学びを基本とする。【授業形態】

・学力差に鑑み、授業のＵＤ化に努める。【授業内容・方法】

本単元では、「論理的に文学作品を読む力」を育てることがテーマになる。そのための指導のポイントとして、次の３点を重視する。

◆ポイント１◆論理的に読むための基礎･基本をおさえる

文学作品のおもな学習課題は、「中心人物の変容」「因果関係「作者の主張(主題)」である。

第一段階の読み(作品の全体をつかむ)では、「１０の観点で読む」「変容の概要をつかむ(作品の三部構成を読む)」活動を行う。第二段階の読み(細部を読む)では、「逆思考の読み」「アニマシオンゲーム(どんな順番？)」「お話の図を読み解く」活動を行う。第三段階の読み(全体を読む)では、「中心人物の変容をとらえる(逆思考の読み、お話の図、一文で書くを利用する)」「主題をとらえる」活動を行う。

「１０の観点」は、作品全体をつかむために必要な観点である。文学作品の１０の観点は、①時・場所②登場人物③中心人物④語り手⑤出来事⑥大きく変わったこと⑦三部構成⑧お話の図・人物関係図⑨一文で書く⑩おもしろさである。その作品の特徴をとらえ、いくつかの観点を選択して読むことが重要である。

文学作品の三部構成の原理・原則は、「はじめ」(◎中心人物の紹介・状況の説明。◎中心人物と対人物は出会っていない。)「中」(◎中心人物と対人物が出会う。◎出来事や事件が起きる。)「おわり」(◎中心人物の変容した結果。◎抽象的なまとめの表現。)である。「中」には、「展開部」と「山場の部」(クライマックス)が含まれる。三部構成に分けることで因果関係や変容をとらえやすくなる。(筑波大学附属小学校・白石範孝さんの著書より要約引用)

今回は、【第２時】の授業に採り入れて実践する。

◆ポイント２◆「逆思考の読み」を採り入れる

「逆思考の読み」とは、作品の結末から最初に向かって、問いと答えをつくり自問自答しながら読み解いていく活動である。「うしろ読み」とも言う。

「逆思考の読み」を行う際は、右端に中心人物の最初の状況(初めの柱)を、左端には中心人物が変容した結果(終わりの柱)を書く。次に、終わりの柱に対する問いと、それに対する答えを書く。さらに、出てきた答えに対する問いをつくり、答える。これを繰り返すことで、初めの柱の状況までたどり着く。それによって、因果

関係や物語の流れが一目で分かるようになる。

作品の初めから終わりに向かって読み解く通常の学習は、物語の概略をなぞり、内容を確認するだけで終わってしまいがちで、論理的思考を伴わない授業である。一方、「逆思考の読み」では、「なぜ、こうなったか」を繰り返し考えるため、論理的に思考する訓練ができる。（白石範孝さんの著書より要約引用）

今回は、【第３・４時】の授業に採り入れて実践する。教材研究段階の私の読みが不十分で、「逆思考の読み」をツールとして生かし切れる状態ではない。初めての試みであり、子どもたちにも戸惑いがあるだろう。授業の停滞や混乱は織り込み済みのものとして、果敢に挑戦したい。

◆ポイント３◆「しかけ」をつくる

子どもたちが楽しく「わかる・できる」授業をつくるために、教材にしかけをつくる。教材にしかけをつくることで、子どもたちが「話したくなる」「考えたくなる」授業に変えていくことができる。それによって、論理的な「話し方･聞き方、書き方、読み方」を、子ども自らが学ぶようにすることができる。（筑波大学附属小学校・桂聖さんの著書より要約引用）

今回は、次の３つの場面で使う。

【第５時】人物関係を図解する《図解》

本教材では、二人の登場人物の生き方や考え方が中心人物の成長に大きな影響を与えている。それぞれの登場人物の生き方（言葉や行動）を図解し、視覚的に示すことで、中心人物との関係を整理することができる。

【第６時】文を配置する《配置》

中心人物を表現している言葉（村一番の漁師・本当の一人前の漁師）が中心人物の生き方を表している。中心人物が生きる場所をどこに求めているかを考えることによって、人物像に迫る。

【第８時】語句を置き換える《置き換え》

本教材は、中心人物の生き方が物語の題名や結末に表れており、そこから主題を考えることができる。結末の語句を置き換えることで、キーワードから主題を考えさせていく。

これまでに５度、「海のいのち」の授業機会があった。その間に３回、教科書会社や教材の位置づけが変わったこともあるが、毎回、授業のカタチを変えてきた。ある時は作品の奥深さに押しつぶされ、ある時は迷路に入り込み、…なかなかこの作品は手強い。今回の挑戦は、フルモデルチェンジと言えるほど、これまでと切り口が違う。子どもたちとのラストチャレンジを楽しみたい。

4　指導計画（全９時間）

次	時	主な学習活動	評　価　規　準	評価方法
一	物語を読んで、学習の見通しを持つ。			
	1	○学習のねらいと流れを確かめ、初発の感想を発表する。	○物語に興味を持ち、物語の内容をとらえて、初発の感想をまとめようとしている。【関心・意欲・態度】	発言 ノート
二	物語の構成をとらえる。			
	2	○三部構成（はじめ・中・おわり）を読み、全体の構成をとらえる。 ※登場人物、中心人物、三部構成、一文で書く	○場面分けの仕方を理解し、文章の構成をとらえている。【読む】	発言 ノート
三	物語の流れをおさえ、中心人物の変化を読み取る。			
	3 4	○「初めの柱」と「終わりの柱」を決めて、逆思考の読みを行う。	○終わりの柱から問いを作り、答えを探している。【読む】	ノート 発言
	5	○二人の登場人物と中心人物との関係を整理する。	○中心人物が登場人物からどのような影響を受けたのかをつかんでいる。【読む】	ノート 発言
	6	○中心人物の生き方を考える。	○中心人物の生き方を読み取っている。【読む】	ノート 発言
	7	○「一文で書く」ことで、まとめをする。	○中心人物の変容を踏まえて作品の全体をとらえている。【読む】	ノート 発言
四	強く心に残ったことをまとめる。			
	8 9	○作品の主題を考え、最も強く語りかけてきたことについてまとめる。	○キーワードから作品の主題を考えている。【読む】 ○物語が自分に最も強く語りかけてきたことを、自分の言葉でまとめている。【書く】	ノート 発言

５－１　本時案（第２時）　　2014 年 10 月 20 日(月)　第２校時

(1) 目標　三部構成(はじめ・中・おわり)を読み、全体の構成をとらえることができる。

(2) 展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
１　前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。	**➡焦点化**	
物語を「はじめ」「中」「おわり」の３つの部分に分けよう		
２　登場人物を確認し、中心人物をとらえる。	○「中心人物」の原理･原則は「物語の中で最も大きく変容した人物」であることをおさえる。。	
３　物語を３つの部分に分ける。	○「三部構成」の原理･原則をおさえる。 **➡視覚化** ○グループで話し合いながら確認を行う。	・場面分けの仕方を理解し、文章の構成をとらえている。 （ノート・発言）
４　物語を一文で書く。	○「一文で書く」ための文型は「【中心人物】が【出来事】によって【変容する】話」であることをおさえる。	
５　本時学習のまとめをする。		

５－２　本時案（第３・４時）　　2014 年 10 月 21 日(火)　第５校時
2014 年 10 月 21 日(火)　第６校時

(1) 目標　作品の結末から問いを作り、それに対する答えを見つけることができる。

(2) 展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
１　前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。	**➡焦点化**	
物語の結末から問いを作り、答えを見つけよう		
２　「はじめの柱」と「おわりの柱」を確認する。	○中心人物(太一)の生き方や考え方が表れているところを探させる。	
３　「おわりの柱」から問いをつくり、それに対する答えを探す。		
(1)「おわりの柱」から問いをつくる。	○結末の３文について、１文に１つずつ問いをつくらせる。 【支援】「なぜ、…？」「…ってどういうこと？」という問いの文型を指示する。 **➡視覚化** **➡共有化**	・終わりの柱から問いを作り、答えを探している。 （ノート・発言）
(2) 問いに対する答えを探す。	○問いに含まれるキーワードを手がかりに、答えにあたる場面を探させる。 **➡共有化**	
(3) 答えから次の問いをつくり、答えを探す。		
４　本時学習のまとめをする。		

５－３　本時案（第５時）　　2014 年 10 月 22 日(水)　第５校時

(1) 目標　中心人物が登場人物からどのような影響を受けたのかをまとめることができる。

(2) 展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
１　前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。	**➡焦点化**	
父と与吉じいさの生き方は、太一にどんな影響を与えたか ？		
２　人物関係図を整理する。	○間違った人物の関係図を提示し、３人の登場人物の関係を確認させる。 **➡視覚化**	
３　登場人物の生き方を見つける。	○それぞれの人物の漁師としての行動が分かるところを見つけさせる。 【支援】父や与吉じいさが出てくる場面を見つけ、本文から手がかりになる言葉を探させる。 **➡視覚化** **➡共有化**	
４　父と与吉じいさの生き方(言葉や行動)は、太一にどんな影響を与えたか考える。	○父と与吉じいさの漁師としての行動と、太一の行動とを関連づけてとらえさせる。 **➡共有化**	・父と与吉じいさの生き方と関連づけて、太一の行動をまとめている。 （ノート・発言）
５　本時学習のまとめをする。		

５－４　本時案（第６時）　　2014 年 10 月 23 日(木)　第４校時

(1) 目標　中心人物の生き方について考えることができる。

(2) 展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
１　前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。	**➡焦点化**	
中心人物の生き方について考えよう		
２　「村一番の漁師」と「本当の一人前の漁師」について考える。	○「村一番の漁師」「本当の一人前の漁師」という語を含む３つのセンテンスカードを提示し、海面と船･瀬の主の絵に位置づけさせる。 **➡視覚化**	
３　太一はどんな漁師なのか考える。 ○「村一番の漁師」と「本当の一人前の漁師」について考える。	○「村一番の漁師」＝海上＝１本づりの漁師、「本当の一人前の漁師」＝海中＝もぐり漁師であることをおさえる。 【支援】それぞれのセンテンスが出てくる場面を見つけ、本文の言葉を手がかりに考えさせる。 **➡視覚化** **➡共有化**	
○太一の生き方をまとめる。	○太一はどんな漁師なのかを、「ア」「イ」「ウ」を手がかりにまとめさせる。 **➡共有化**	・太一の生き方について、どんな漁師かを手がかりにまとめている。 （ノート・発言）
４　本時学習のまとめをする。		

５－５　本時案（第７時）　　2014 年 10 月 24 日(金)　第１校時

(1)目標　中心人物の変容を踏まえ、作品を一文で書くことができる。

(2)展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
１　前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。	**➡焦点化**	
「海のいのち」のお話を一文で書こう		
２　「一文で書く」文型を確認し、第２時に書いた「一文」を振り返る。	**➡視覚化**	
３　中心人物(太一)の変容を踏まえて、物語を一文で書く。	○逆思考の読みの過程を手がかりに、【中心人物】【出来事】【変容する】の内容を再検討させる。 **➡視覚化** ○全体交流の中で、次の点を検討する。 【中心人物】 「父のような（父をこえる）もぐり漁師になりたいと思っていた」ｏｒ「父のかたきである瀬の主を殺したいと思っていた」 【出来事】 「与吉じいさに出会ったこと」ｏｒ「瀬の主を海のいのちだと思うこと」 【変容する】 「瀬の主を殺さずにすんだ」ｏｒ「村一番の漁師であり続けた」 ※子どもの意見から出てこない時は、教師から提示する。 **➡共有化**	・二次の読みを踏まえて、「海のいのち」を一文で書いている。 （ノート・発言）
４　本時学習のまとめをする。		

５－６　本時案（第８・９時）　　2014 年 10 月 27 日(月)　第２校時
2014 年 10 月 27 日(月)　第３校時

(1) 目標　作品の主題を考え、最も強く語りかけてきたことについてまとめることができる。

(2) 展開

学習活動	教師の指導と支援	評価
１　前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。	**➡焦点化**	
作品の主題を考え、自分の言葉でまとめよう		
２　語句を置き換えた結末部分を正しく直す。	○文章を正しく直すことで、キーセンテンス・キーワードを意識させる。 **➡視覚化**	
３　「海のいのち」とは何か考える	○「１０００びきに１ぴきしかとらない→海のいのちは変わらない」「大魚はこの海のいのち」という表現を手がかりに、抽象的表現を具象化させる。 **➡視覚化**	
４　なぜ太一は、巨大なクエのことを誰にも話さなかったのか考える。	○逆思考の読みの過程を手がかりに、自分の考えをまとめさせる。 **➡視覚化** 【支援】考えがまとめられない時は、「もし、話していたら…」という文を書かせてみる。 **➡共有化**	
５　結末の太一の行動から、作者は何を伝えているのかを考え、自分の言葉でまとめる。 ６　作品の主題について交流する。 ７　本時学習のまとめをする。	○作者・立松和平さんへの手紙のかたちで、作品から受け取ったメッセージをまとめさせる。 **➡共有化**	・作品が最も強く語りかけてきたことを、自分の言葉でまとめている。 （ノート・発言）

海のいのち

立松 和平 文
伊勢 英子 絵

父もその父も、その先ずっと顔も知らない父親たちが住んでいた海に、太一もまた住んでいた。季節や時間の流れとともに変わる海のどんな表情でも、太一は好きだった。

「ぼくは漁師になる。おとうといっしょに海に出るんだ」

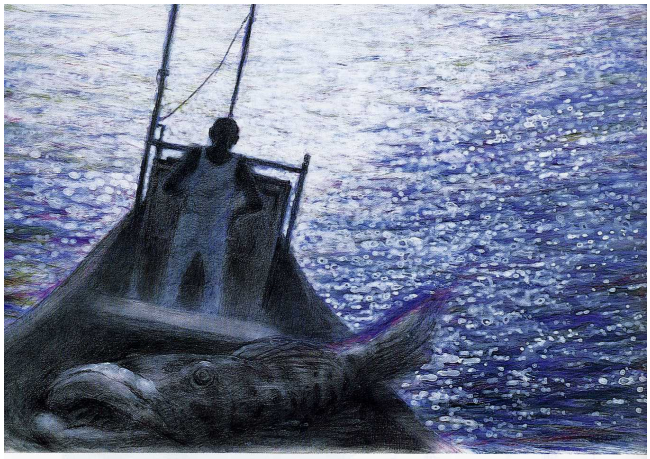
子供のころから、太一はこう言ってはばからなかった。

父は、もぐり漁師だった。潮の流れが速くて、だれにももぐれない瀬に、たった独りでもぐっては、岩かげにひそむクエをついてきた。二メートルもある大物をしとめても、父は自慢することもなく言うのだった。

「海のめぐみだからなあ。」

潮

クエ（本州中部から南の太平洋岸にいる魚。体長は、一メートルをこえる。）

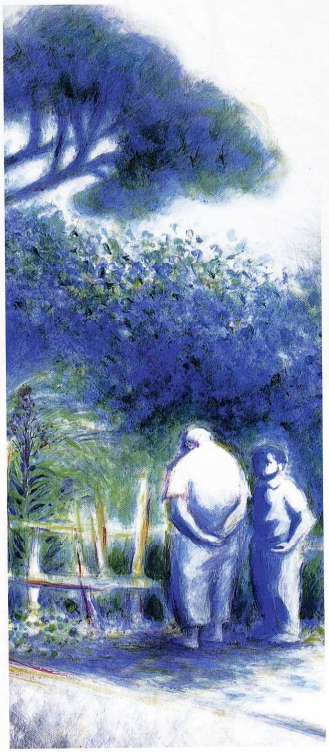


不漁の日が十日間続いても、父は何も変わらなかった。

ある日父は、夕方になっても帰らなかった。空っぽの父の船が瀬で見つかり、仲間の漁師が引き潮を待ってもぐってみると、父はロープを体に巻いたまま、水中で事切れていた。ロープのもう一方の先には、光る緑色の目をしたクエがいたという。

父のもりを体につきさした瀬の主は、何人がかりで引こうと全く動かない。まるで岩のような魚だ。結局、ロープを切るしか方法はなかったのだった。

巻



中学校を卒業する年の夏、太一は、与吉じいさにでしにしてくれるようたのみに行った。与吉じいさは、太一の父が死んだ瀬に、毎日一本づりに行っている漁師だった。

「わしも年じゃ。ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を海に自然に遊ばせてやりたくなっとる。」

「年を取ったのなら、ぼくをつえの代わりに使ってくれ。」

こうして太一は、無理やり与吉じいさのでしになったのだ。

与吉じいさは、瀬に着くや、小イワシをつり針にかけて水に投げる。それから、ゆっくりと糸をたぐっていくと、ぬれた金色の光をはね返して、五十センチもあるタイが上がってきた。バタバタ、バタバタと、タイが暴れて尾で甲板を打つ音が、船全体を共鳴させている。

太一は、なかなかつり糸をにぎらせてもらえなかった。つり針にえさを付け、上がってきた魚からつり針を外す仕事ばかりだ。つりをしながら、与吉じいさは独り言のように語ってくれた。

「千びきに一ぴきでいいんだ。千びきいるうち一ぴきをつれば、ずっとこの海で生きていけるよ。」

与吉じいさは、毎日タイを二十ぴきとると、もう道具をかたづけた。

季節によって、タイがイサキになったりブリになったりした。

授業記録

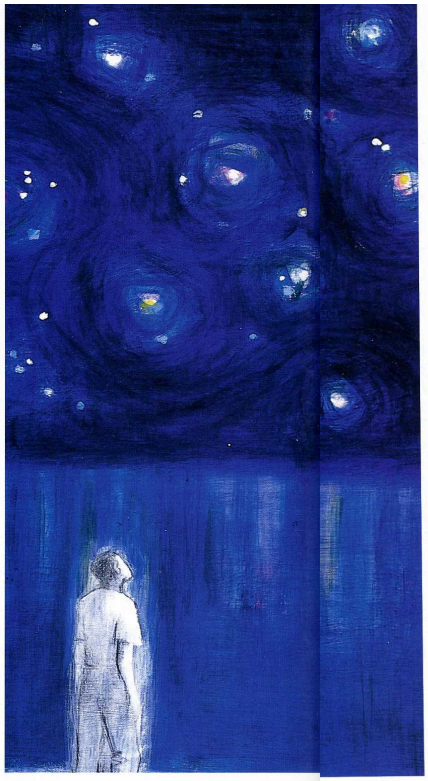
でしになって何年もたったある朝、いつものように同じ瀬に漁に出た太一に向かって、与吉じいさはふっと声をもらした。そのころには与吉じいさは船に乗ってこそきたが、作業はほとんど太一がやるようになっていた。

「自分では気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。太一、ここはおまえの海だ。」

船に乗らなくなった与吉じいさの家に、太一は漁から帰ると毎日魚を届けに行った。真夏のある日、与吉じいさは暑いのに毛布をのどまでかけてねむっていた。太一はすべてをさとった。

「海に帰りましたか。与吉じいさ、心から感謝しております。おかげさまでぼくも海で生きられます。」

悲しみがふき上がってきたが、今の太一は自然な気持ちで顔の前に両手を合わせることができた。父がそうであったように、与吉じいさも海に帰っていったのだ。



ある日、母はこんなふうに言うのだった。

「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言いだすかと思うと、わたしはおそろしくて夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるようで。」

太一は、あらしさえもはね返すくっ強な若者になっていたのだ。太一は、そのたくましい背中に、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。

いつもの一本づりで、二十ぴきのイサキを早々ととった太一は、父が死んだ辺りの瀬に船を進めた。

いかりを下ろし、海に飛びこんだ。はだに水の感しょくがここちよい。海中に棒になってさしこんだ光が、波の動きにつれ、かがやきながら交差する。耳には何も聞こえなかったが、太一はそう大な音楽を聞いているような気分になった。とうとう父の海にやってきたのだ。

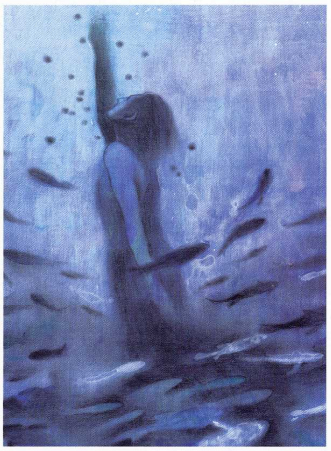
太一が瀬にもぐり続けて、ほぼ一年が過ぎた。父を最後に、もぐり漁師がいなくなったので、アワビもサザエもウニもたくさんいた。はげしい潮の流れに守られるようにして生きている二十キロぐらいのクエも見かけた。だが太一は興味を持てなかった。

追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ。

太一は海草のゆれる穴のおくに、青い宝石の目を見た。

海底の砂にもりをさして場所を見失わないようにしてから、太一は銀色にゆれる水面にうかんでいった。息を吸ってもどると、同じ所に同じ青い目がある。ひとみは黒いしんじゅのようだった。刃物のような歯が並んだ灰色のくちびるは、ふくらんでいて大きい。魚がえらを動かすたび、水が動くのが分かった。岩そのものが魚のようだった。全体は見えないのだが、百五十キロは優にこえているだろう。

興奮していながら、太一は冷静だった。これが自分の追い求めてきたまぼろしの魚、村一番



穴（あな） 宝（ホウ たから） 砂（サ すな） 吸（キュウ すう） 灰（はい）

奮（フン ふるう）